

# 曾利遺跡

—農道整備事業に伴う第八次発掘調査報告書—

1998

長野県富士見町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴い、調査地方事務所の委託をうけて富士見町教育委員会が実施した曾利遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成9年(1997)11月に行われた。
- 3 発掘調査は小林公明が担当し、本書の執筆は小林が、実測図の製図は小松隆史が行った。
- 4 本報告にかかる出土品、諸記録は井戸尻考古館に保管されている。

# 1 調査の経過

曾利遺跡は、八ヶ岳南麓における縄文時代中期の標式的な遺跡として知られている。昭和35年（1960）以来、これまで7回にわたる発掘調査が行われ、6次調査をのぞいて報告書が刊行されている。

遺跡は南北300mにわたっており、その中ほどに井戸尻考古館が建っている。ここは尾根幅が75~80mあり、西縁がもっとも張ったところである。今回、8次調査の対象となったのは、考古館に接するこの遺跡西縁である。農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業富士見南地区の道路敷として、館の敷地の幅2m・延長60mが欠き取られることになった。ために長野県教育委員会・諏訪地方事務所・富士見町教育委員会の三者で協議を行い、工事に先立って発掘することになったのである。

# 2 遺構と遺物

発掘の結果、中期の住居址3軒、小堅穴12基、屋外埋設土器1箇所を検出した。他に調査区の上手で細い溝跡がみられたが、時代は不明である。表土層は浅く、15cmていどの暗褐色土で地山のローム層に移る。

2m弱の幅であるため、3軒の住居址はいずれも全体の三分の一といでの発掘にとどまった。このうち上手に位置する住居址は、過去に発掘を受けていた。往年の調査の記録ならびに地元の功刀郷郎氏などの話によれば、これが、昭和18年に宮坂英式が発掘した滝坂1号住居址である。「井戸尻」（昭和40年 中央公論美術出版）におけるその位置は実際より上手北側によっているが、住居址の測量図は間違いがない。そこで、この住居址を改めて曾利の1号住居址としよう。なお「井戸尻」では、この住居の南東側に接して2号住居址の存在が図示されている。

調査区の下手と中ほどの住居址は90・91号とした。これは平成9年（1997）3月、館の前庭を横断する水道管布設替工事の際に確認された5基の住居址に85~89号を振ったからである。

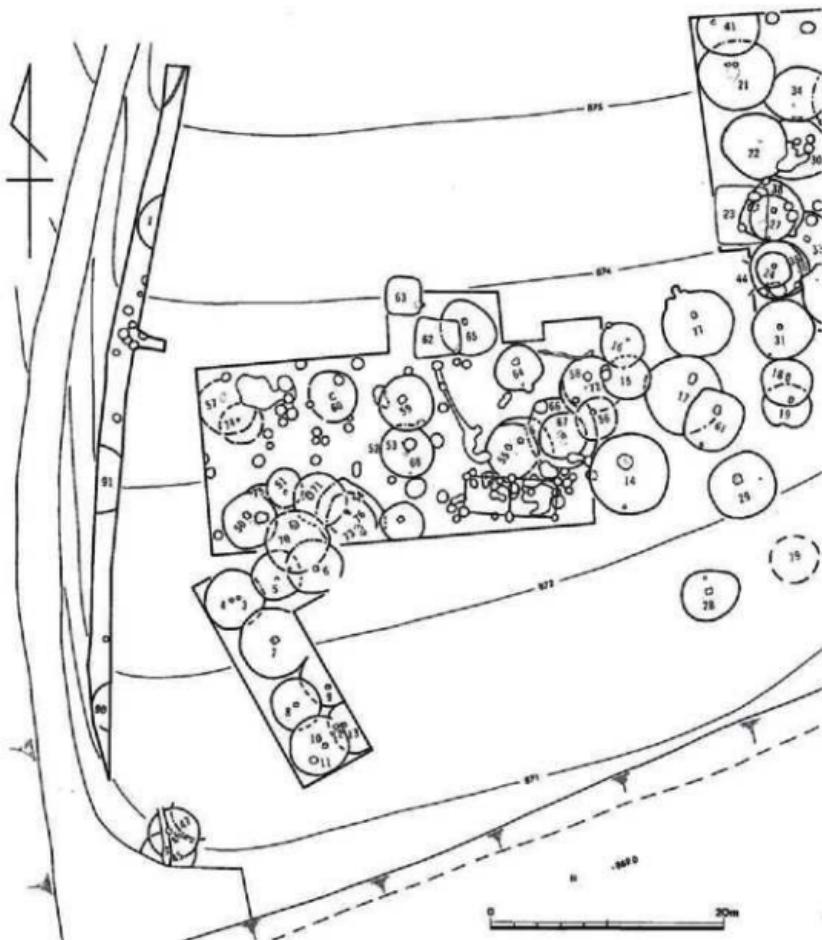
## 第1号住居址

昭和18年の発掘記録によれば、この住居址は径5.3mの不整円形で、北側は高さ30cmの壁がめぐるが、南半分では認められない。柱穴は18個所に検出された。床は中央から四周にかけて上り勾配を示し、凹凸が甚だしく、軟弱である。中央に径1mの円形に火熱を受けた痕跡があ

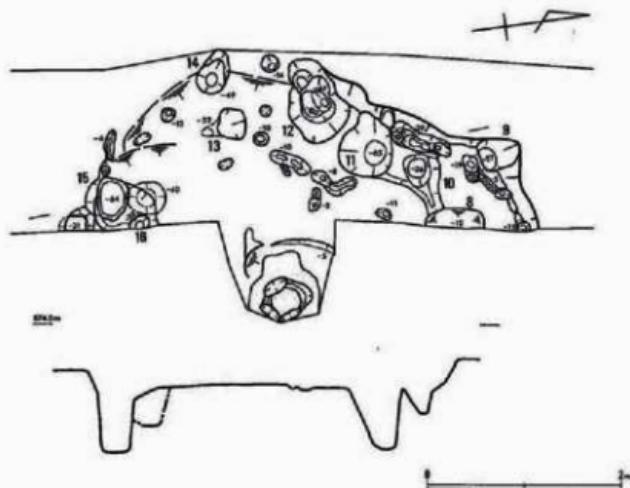
り、その中に扁平石5個を組んだ石圓炉が設けられていた。時期は藤内Ⅰ期である。

再発掘したのはその西側、三分の一ほどの範囲に相当する。図の柱穴番号は「井戸尻」掲載の測量図のそれに合わせてある。当時の発掘は柱穴の底まで完全には達しておらず、P15の底近くからホルンフェルス製の石鉄が出土した。またこの穴に接して、上部を7cm厚のロームで埋めたてられた柱穴を新たに検出した。

炉の位置を確認してみると、炉石は発掘後に抜き取ったらしく、見当たらない。その周りは、



第1図 曾利遺跡第1～5次発掘区と第8次発掘区の位置関係 (1/500)



第2図 第1号住居址 (1/60)

ローム粒と焼土粒まじりの固い黒褐色土が張られている。厚さ1~2cmで、これを除くと赤く焼けたロームの床があらわされた。これらの範囲は円形に数センチ、凹んでいる。柱穴の配置からみても、本址は新旧二時期があるので、この焼土面は古い住居の地床炉であろう。

床は固く、水平である。「井戸尻」に記述されるような状態ではない。

遺物は、藤内I式土器が石油箱4つ、石器が14点であったという。「井戸尻」には6点の土器が図示されている。が、そのうちの1点は井戸尻I式であり、浅鉢の1点は九兵衛尾根II式かと疑われる。今回の再発掘で収集した土器片は藤内I式を主体とし、九兵衛尾根I・II式が混じっている。

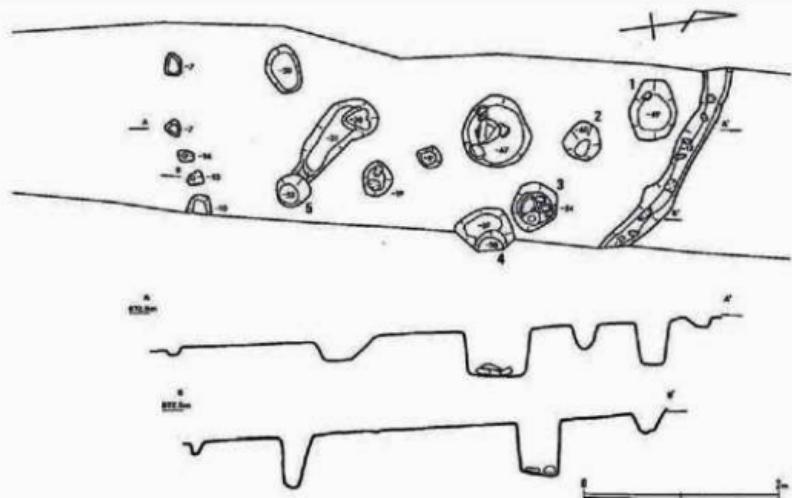
#### 第91号住居址

西半分は道路によって失われている。浅くて壁の立ち上がりも認められないが、径6mの大きな住居址である。床は西南に傾斜している。主柱穴は5個所に検出された。このうちP3は、東壁に寄った穴の半ばに人頭大の丸石が、底近くに餅状の平石と拳大の石、硬砂岩の礫石器などが入っていた。

中央やや北側の小竪穴は、本址より後のものとみられる。底に大小5個の安山岩礫が残されていた。

遺物はごく少ない。土器は小破片で、藤内式と九兵衛尾根式がある。

時期は確定できないが、住居の床のあり方に藤内期の特徴が認められないので、九兵衛尾根



第3図 第91号住居址 (1/60)

期とみた方が無難だろう。

#### 第90号住居址

浅い住居址であるが、上手北側に周溝の跡をとどめ、その延長上、西側に弧を描いて竪穴が検出された。径4mばかりである。床は南に傾いている。しかし、炉の位置はこれらとあまり合致しない。

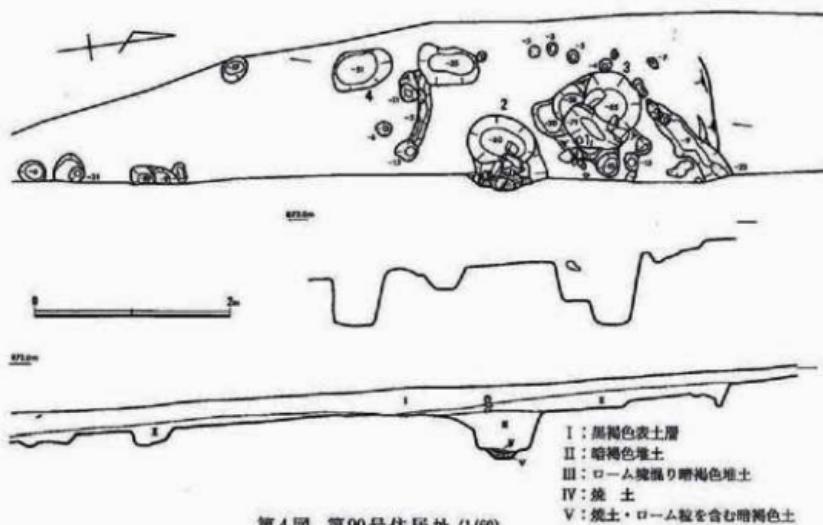
発掘区の境にかかって炉址の一部があらわれた。炉石は抜き取られているが、深さ35cmほどあり、底は赤く焼けている。炉穴にはローム塊まじりの暗褐色土が堆積し、上部には大小7～8個の礫がまとまっていた。

炉穴の西に接して柱穴状の穴P2がある。さいころ大のロームを混じえた明褐色土が堆積し、底にホルンフェルスの石片が置かれていた。

P1もP2と全く同じ堆積土であった。穴の底は不整形である。この穴の南東縁に当たる住居址の堆土上面には、乳幼児の拳大の安山岩礫が36個ほど溜められていた。が、不注意にも大部分をあげてしまった。図示したのはその一部にすぎない。

P3は、深さ10cm以下は底までロームで埋めたてられていた。その上縁にかかって、一対の石うすの破片が残されていた。それぞれ別個体のものである。周溝との位置関係からみて、主柱穴と思われる。

P4は、径20cmほどに木炭の細片が分布する柱痕が認められた。深さからしても柱穴にちが



第4図 第90号住居址 (1/60)

いないが、円弧をなす杭穴の列の外に位置し、本址のものか疑われる。

遺物は少ない。土器片は曾利II式を主体にI式が混じる。III～IV式も認められる。P1・P2からもわずかな土器片が出土した。それぞれ曾利I式とII式である。

土器片から判定すれば、本址は曾利II期とみられる。しかし、炉の形態はIII期以降のもので、II期にしては深すぎる。遺構の位置関係も判然とせず、曾利II期とIII～IV期の新旧二時期の重複も考えられる。

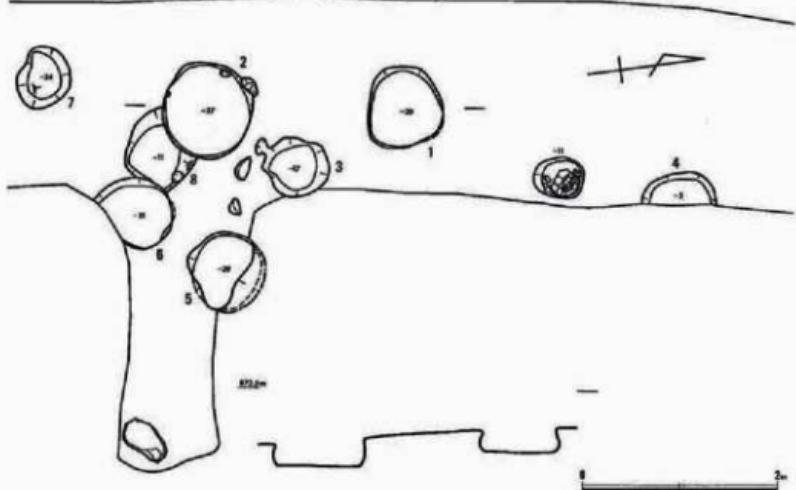
なお、90号址の南側下手には浅い柱穴がいくつか認められた。

#### 小豎穴と土器の埋設

1号址と91号址の中間に、小豎穴が散らばっている。これらのうち、1号・2号は同形態のたらい状の穴で、側壁がやや袋状を呈する。5号も袋状気味である。他の穴は浅く、底も凸凹している。7号と8号はソフトローム質の明褐色土が堆積していたが、他は褐色ないし暗褐色堆土であった。

それぞれ少量の遺物が出土した。1号は九兵衛尾根式土器片、2号は九兵衛尾根I式土器片、5号は、前期末の龍烟I式と中期初頭の九兵衛尾根式土器片、石錐1点、安山岩の小石2点である。他に3・6・7号から出土した若干の土器片も九兵衛尾根式である。したがって、これら的小豎穴群は同期のものと考えて差し支えないだろう。

これらの一帯に、土器が埋設されている。径40cm余り・深さ10cmほどの浅い穴を掘り、その



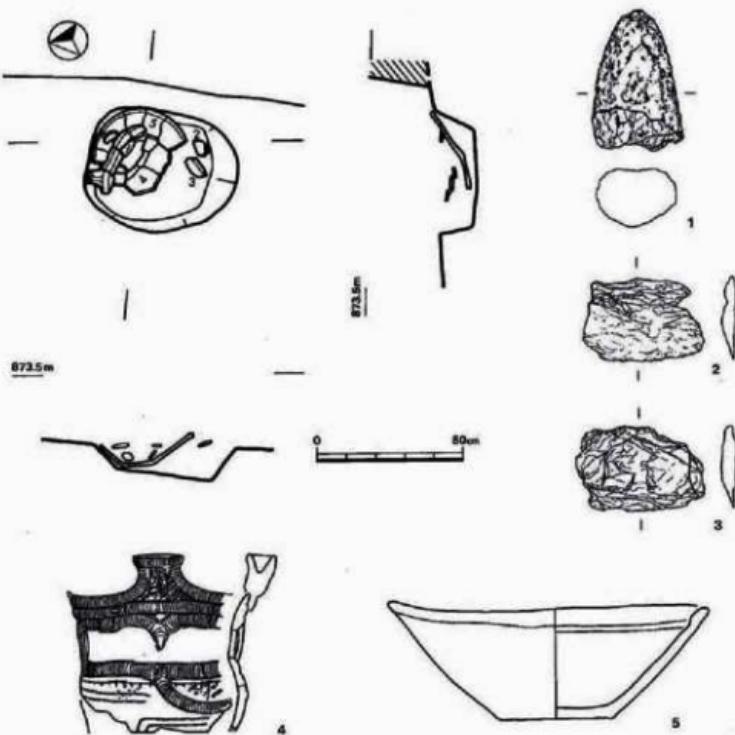
第5図 小豎穴群と埋設土器 (1/60)

東縁に寄せて浅鉢を掘え、これに深鉢の上部を伏せてある。中に粗い敲打を加えられた乳棒状石斧の基部が入っていた。石質は変輝岩。またこれらの南に接する掘り方上面に、同様な寸法・形態の石庖丁状石器が伴われていた。石質はスレートとホルンフェルス。

深鉢は九兵衛尾根Ⅰ式で、腹から腰にかけての位置より下は失われている。口縁は前後が山形に凸出し、左右は小さく尖る。頸部の上下を一周する隆帯は、左右で橋のように結ばれている。隆帯の連続爪形文は細密である。部分的に繩文も転がされている。器壁はうすく、内壁の下半にはお焦げがみられる。浅鉢は無文で、底はあるものの器体の半周を欠く。

その時期は小豎穴群と同じであり、それらとも関連した何らかの埋葬施設と思われる。

6号小豎穴の東へ2mの位置には、長径50cmの厚い石が置かれている。また、これらの小豎穴群の南へ5mと90号址の北へ4mの位置にも浅い小豎穴が見出された。91号址の中の小豎穴については先に記した。



第6図 土器の埋設 (遺構 1/20 土器 1/6 石器 1/3)

### 3 結 語

曾利遺跡は、中期の前半と後半とでおよそ住居の分布が分かれている。すなわち大雜把にみて、九兵衛尾根期から井戸戻期では尾根の北寄りを占める馬蹄形ないし環状集落が推定され、曾利期ではこれに相接し重なって南寄りを占める同様な集落が推定されている。

今回の調査で露呈した遺構は、集落の西の限界とみて間違いない。91号址と90号址は時期の確定ができないが、そのような集落配置に沿ったものといえる。

発掘参加者名簿

担当者 小林 公明

調査員 梶口 誠司 小松 隆史 吉岡 博子 吉川 哲也

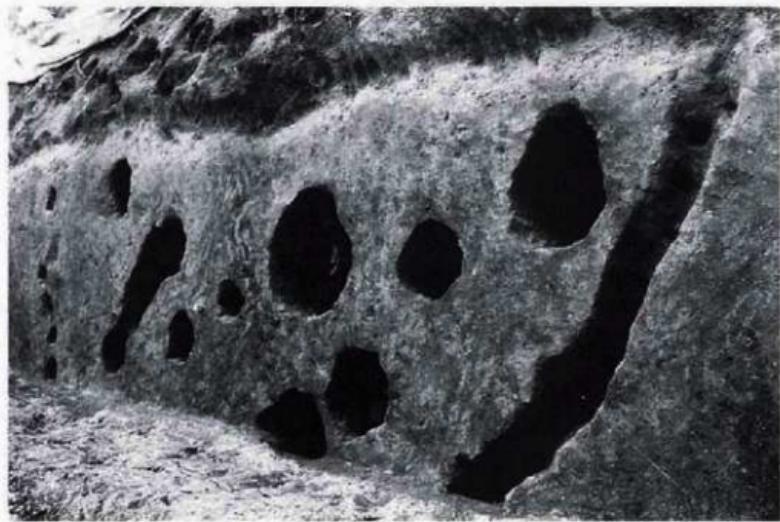
作業員 小平 昰夫 小林 一 小林ノリ子 小林 道子 小林やす子  
名取 武 平出 康喜 平出 虎一 平出みね子 武藤きのゑ

图版 1

第1号住居址



第91号住居址



第90号住居址



第90号住居址





小堅穴群(西から)



小堅穴群(南から)



埋設土器 (上 出土状態 下 埋設状態)

---

## 曾利遺跡

—農道整備事業に伴う第八次発掘調査報告書—

1998年3月

発行 富士見町教育委員会  
印刷 もえぎ企画書籍  
岡谷市御倉町2-21  
TEL0266-22-4892

---